

SESSION 7

PROJECT INITIATION AND MANAGEMENT

翻訳プロジェクトの運営

...

Shiraishi Eri, Takechi Manabu, Saji Yasuo

パネル：白石恵理、武智 學、佐治泰夫

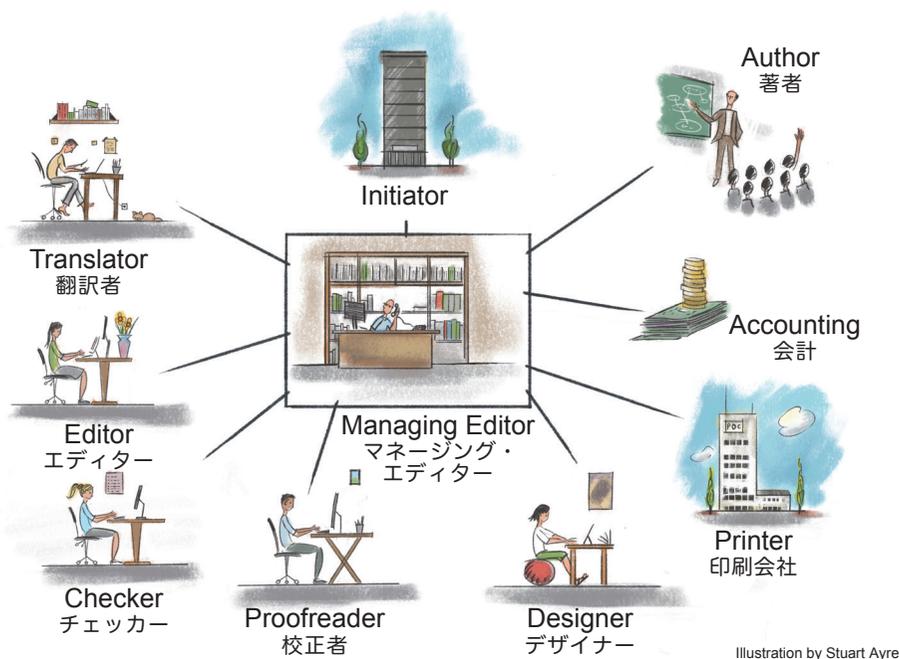
Lynne Riggs: 本セッションでは、翻訳出版を進めていくプロセスにおける人的、事務的な問題を中心に話し合ってみたいと思います。一般の出版においては、たとえば執筆者と編集者、校閲者といった人たちの間での作業になるのですが、学術翻訳、とくに人文・社会科学系の場合は、午前中のトークにも触れられていたように、翻訳が入ってくるために、かなり複雑なプロセスになります。最初に私のほうから、図を使って簡単に説明しておきたいと思います。

Crucial Role of Bilingual Managing Editor

関わってくる人が多くなりますので、誰かが舵取り役、根回し役をしなければなりません。いろいろな人が自分の好きなようにやっているのは、一人ひとりがどんなに優れていても、まとまりがつかず、よい仕事はできません。プロジェクトの中心にいて、いろいろと切り盛りをする人をマネージング・エディターと呼ぶことにします。たとえば、佐治さんは、LTCBモノグラフシリーズのマネージング・エディターをしていらっしゃる、すべてを取り仕切っていらっしゃいます。後藤さんは、東京大学大出版会の企画連携本部長ですが、マネージング・エディターのお仕事もされているはず。日文研では、英文書籍・学術誌の編集長であるFister、Breen 両教授を支える事務の方がマネージング・エディターの役割を果たしていると考えられます。¹そして運営役であるこの

1 編集制作・進行管理のほか、海外出版社との共同出版や翻訳出版協力プロジェクト(2016年度[第10回]の募集をもって終了)を担当。

Part 3: Effective Scholarly Translation: Management and Process



マネージング・エディターの周りに、著者、翻訳者、編集者、チェッカー、プルーフ・リーダー、デザイナー、印刷所、アカウントといった人々が位置していて、各々の職責を果たしている——ざっとこういうシステムで翻訳の出版は行われていると思います。

ただし、それぞれの役が必ずしも一人によって果たされているわけではなく、一人がいくつかの役を兼務する場合があります。たとえば、人文社会科学翻訳センター（CIC）では、武智さんがマネージング・エディター、翻訳者、編集者、チェッカー、アカウントの役割を兼ねています。このようにマネージング・エディターがいろいろな帽子をかぶることはあるのですが、基本的にはプロジェクトの「ハブ」として非常に大事です。

日本での学術翻訳の場合、いろいろな打ち合わせにはもっぱら日本語が使われますが、スタイル、表現、内容、デザイン等の編集面での決定においては英語主導になりますので、マネージング・エディターは、言葉の面でもやりくりが必要にならうかと思えます。

それではこれから、これまでマネージング・エディターの役を務めてこられた、白石さん、佐治さん、武智さんのお三方に、それぞれどのように運営されてこられたのか、豊富なお経験から重要なポイントをお話いただければと思います。まず白石さんにお伺いします。翻訳プロジェクトを運営される場合、どのようなことを重視してやっていらっしゃるのでしょうか。

Project Initiation and Management

白石:私は6年間日文研の出版編集室に勤めていまして、さきほど解説してくださった図のような感じで働いてきました。マネージング・エディターという言葉は、Fister教授が私をそのように呼んでくださったことで、初めて認識したというのが正直なところですよ。

和英バイリンガルの本の編集などに携わった後、出版編集プロジェクト員という職名により日文研で働き始めました。スタッフが私を含めて3名しかおらず、私一人だけがフルタイム職員だったので、自然と全出版物の取りまとめ役を担うことになりました。

当時の私の仕事は、まず予算管理、もう一つがスケジュール管理、それから編集・制作に関わるディレクションでした。編集・制作においては、裏方の裏方で、翻訳者、編集者をはじめとする皆さんがそれぞれ役割を演じられている、その縁の下でエンジンを動かす役目です。ときにプロジェクトの車が動かなくなることがあると、「予算ありき」「スケジュールありき」の制約の中、粘り強く待ちながらも、いかに動かし続けていくかに苦心しました。非営利の学術出版では、この「待ち」の要素が商業出版と大きく違っているところかなと思います。とくに翻訳出版に関しては、昨日も皆さんおっしゃっていたように、翻訳作業だけに2年もしくは3年かかるわけです。ですから他の出版物とは違うサイクルでの動き方になります。その部分での「待ち」と、ひとたび原稿が揃って翻訳者の手を離れ制作プロセスに入ったときの、ひたすら納期までに間に合わせるような動き方——そういう特異なサイクルの中でいろいろやっていかなくてはなりません。

Riggs:今おっしゃった「縁の下でエンジンを動かす」とき、英語と日本語の両方が関係してくると思うのですが、具体的にどういうところで英語力が求められますか？

白石:翻訳出版に限らず、学術出版のマネージング・エディターとして、英語については、ネイティブ並みとまではいかずとも、ある程度アカデミックな読み書きには慣れていないといけないと感じます。日文研で働いていると英語以外の言語にも触れますので、英語の他に中国語と韓国語もある程度読めたら便利だろうな、と常々思いながら仕事をしていました。

ご出席されている皆さんのお仕事すべてに言えるのではないかと思います。プロジェクトのチームメイトは各地に散らばっていて、コミュニケーションのほとんどがメールのやり取りで行われます。その中で、日本語と英語の両方が飛び交っている状況です。問い合わせに対しては、日本語、英語どちらの場合でも、スピーディーに返答することが求められます。

日文研モノグラフシリーズの場合は、幸いにして翻訳者のRiggsさんや

Fister 編集長という、日本語が達者な方たちとのコミュニケーションが多く、たとえ英語が多少苦手でも助けてもらえるでしょうが、海外の出版社とのやり取りでは、当然一定の英語力が要求されます。私は、平時は何とか自力でこなしていますが、トラブルなどの込み入った事情に関しては、Fister 編集長に見ていただいて、詳しくご説明いただくこともありました。しかし、たとえば年度末までに必要なモノグラフの買い取り分 1,000 部の到着が遅れそうだ、といった緊急を要する事態のときには、下手な英語でも、「とにかく○月○日までにこういう方法で送ってほしい、明細書にはこう書いてほしい」という交渉をやらざるを得ません。

Choosing Translators

Riggs: 翻訳者選びに関してはいかがでしょうか？ 特に学術翻訳では、適切な翻訳者を見つけるのが難しい作業になりますね。特定の分野の特定の内容にふさわしい翻訳者はそんなに多くいるわけではないですし、プロジェクトのスケジュールとの兼ね合いもあるでしょう。プロの翻訳者に頼むのか、著者と同じ分野の学者で翻訳もできる人に頼むのか、翻訳会社に委託するのかなど、いろいろ迷われるかと思うのですが。

白石：日本語を英語にする翻訳者を選択するときにしても、逆に英語を日本語にするときも、翻訳の世界の事情に詳しい、信頼できる方に——もちろん編集長と事前に打ち合わせをした上で——相談します。いわゆる「ロコミ」を利用するのが最善の方法かなど。人的ネットワークの大切さを痛感します。

Fister: 和英翻訳者の選択に関しては、昨日の話のとおり日文研では課題がいくつかあって、最近では信頼できる翻訳者が限られている状態になっています。原因は様々ですが、結果として得た教訓は、多少コストが高めでも、経験を積んで質の高い仕事をする翻訳者が、学術翻訳には大事だということです。依頼候補者を検討し、先方からの見積りや条件が適切であれば、私はそれを白石さんに説明し、白石さんが財務との間の調整を行いました。

白石：翻訳者選びに関しては、日文研の場合、完成翻訳の質という問題のほかに、もう一つ、公的機関ならではの制約があります。支払いをめぐる問題です。個人への支払い方法と、会社・法人に対する手続きは違います。仮に法人の場合、Fister 編集長と相談して、「私たちはここに頼みたい。なぜなら翻訳の質が高いから」と財務に話を持っていったとします。ある金額のライン以下であればそのまますんなり契約できるのですが、その金額を超えると、日文研に限らない

Project Initiation and Management

話でしょうが、見積り合わせ、つまり入札にしなければいけないのです。そうになると単純に料金の安さだけで決められてしまい、翻訳の質は二の次となる可能性が大了。そのような状況を避けるために、希望する第一候補と何とかいっしょに仕事ができるように働きかけるプロセスが容易ではありません。なぜ、その翻訳者あるいは翻訳会社でなければいけないのかという理由書を書いて提出する必要があるのです。プランニングやデザインといった仕事でしたら、実際にサンプルを見せれば一目瞭然に実力が分かってもらえることもあるでしょうが、英訳の場合、サンプルを比較して違いを分かってもらおうとしても、事務職員の方々がみな英語に精通しているわけではありませんし、仮に精通していたとしても、なぜそこに頼まなければいけないのかを言葉では説明しづらいという難しさがあります。

Riggs: ありがとうございます。そうですね。翻訳の質の違いを判断するのは簡単ではないですね。説得の仕方に何かコツがあるのですか？

白石: 相手にもよります。財務担当者がどの点に重きを置くかで違ってきます。こちらが重視する翻訳の質という問題に理解を持ってくださる方か、ルール優先の方か…。最終的に日文研にとって有益なことは学術的に価値の高い本を出版することですから、お互いに歩み寄るしかありません。そういう意味でのコミュニケーション能力が求められるかなど。あまりゴリ押ししても良くないですし。ルールはルールと認めた上で、編集長と相談しながら、状況に応じて理由書を書きました。

Riggs: ありがとうございます。それでは次に武智さんにお聞きします。CIC の場合は民間会社ですので、日文研とは違い、翻訳者選びなどは自由にできると思いますが。

武智: うちが零細企業で、私と Riggs が中心になって二人で働いています。あとは外部の、われわれのよく知っている経験のあるベテランの翻訳者、校閲者が国内・国外にいますので、そういう方たちに手伝っていただいています。今はインターネットの時代ですので、メールで原稿を送って、メールで英訳を受け取る。とても便利になりました。

翻訳者選びについては、大型プロジェクト、たとえば1冊の本を翻訳する場合、同じ著者であれば、翻訳者一人でやるのがいい。一方複数の執筆者が書いた本であれば、翻訳者も複数にすることが多いです。われわれは一般に仕事量を、400字詰め原稿用紙何枚というふうに換算して考えるのですが、学問的内容の翻訳では、熟練の翻訳者が1日に翻訳できる分量は、平均約5枚、多くて

Part 3: Effective Scholarly Translation: Management and Process

8枚くらいではないでしょうか。内容が非常に専門的であったり、文章に漢語が多用されていたりするともっと少なくなります。その上で、この分野にはこの翻訳者がよいのではないかと、Riggsと相談して目星をつけ、その翻訳者に連絡を取って、いま翻訳の時間が取れるかどうか聞くわけです。うちの翻訳者選びはそういう形で行います。

納期にはなるべく余裕を持たせます。たとえば何月何日に下訳が欲しいという場合、それより2週間から10日ほど前の納期を相手に伝えます。というのは、その後の作業でかなり時間を必要とする場合が出てくるからです。下訳が入ってくると、まず私が日本語原文と比べながら訳文をチェックします。私の段階が終わればRiggsに渡し、エディティングをしてもらう。それが終わると執筆者の方に送ります。そこで見ていただいて、問題があれば、日本語でも何でもいいのですが、「ここはおかしい」などと指示していただき、そこをこちらで修正し、またきれいに整えた改訂版を送る。そのようにして問題が解消された最終稿を、翻訳の依頼者に届けます。

うちの場合、一番困るのが支払いです。下訳を作っていただいて、それが大型プロジェクトですと、最終稿の完成までに相当の時間がかかります。それから印刷に回し、ゲラ刷りを校正する。初校、再校とやる。その頃には、翻訳者が下訳を完成させてからすでに3か月も4か月も経っています。その頃になって、やっと請求書を書くことができるわけです。また請求書を送っても、すぐに入金してもらえないとは限らない。その間、下訳料などのいろいろな支払いを行いながら、何とかしのいでいかなくてはならない。われわれのような零細企業の場合はそこが悩みどころです。

Riggs: 翻訳者選びのとき、武智さんはどういうことを重視して考えますか？

武智: やはりこれまでの実績です。ほとんどの人は、今まで何十年もいっしょにやってきている方々ですので、信用があります。その中で、この人はこの分野が得意だとか、この人は翻訳は上手いけれどもあまり調べてくれないなど、良いところ、弱いところ、大体知っていますから、それで決めます。たとえば、作業は速いが調べるのが弱い人は、チェックするときに注意してこちらで調べればよいので、翻訳本体がしっかりしていれば、それほど大きなマイナスにはならない。

一番こわいのは、こちらも忙しく、当てにしている人たちも忙しくて、誰か新しい翻訳者を紹介してもらおうというときです。今まで何度かそういうことがありました。上がってきた下訳が一定のレベル以上になっていない場合、その修正には再翻訳に近い時間がかかります。大きな損ですよ。そういう苦い経験がありました。やはり自分たちがよく知っている、信用のおける、経験のあるベテランの翻訳者が一番頼りになります。

Project Initiation and Management

Riggs: そうですね。和英翻訳の場合、「一定のレベル以上になっていない翻訳」は、読んでみて、英文として論理が通っていない、明らかなミスが多いといったことで判別できます。ですから、そういう翻訳の質の管理を早い段階において確認するのが賢明かなと思います。でも、最初はあまり翻訳がうまくできていなかったけれども、こちらがどんな仕事を期待しているかを知って、翻訳を習いたいという熱意を持ち、続けていっしょに働くうちにどんどん上手になっていく——そういう人も何人かいましたね。

また翻訳にはいろいろなスタイル——直訳スタイル、literary style、学術的スタイル等々——があります。翻訳者にはそれぞれ持ち味のスタイルがあって、それが reputation になっている。たとえばある仕事にとっては、CIC のスタイルは硬すぎるから、他の翻訳者に回すことがあります。ですから翻訳者探しのときには、ただ間違いが少ないというだけではなく、その仕事に合っているスタイルということも考えると、ピッタリの翻訳者を見つけやすくなると思います。私は何人かの仲間たちと、1980年に SWET (Society of Writers, Editors & Translators) という組織を結成したのですが、その目的の一つは、各翻訳者・エディターがどんなことに向いているのかという情報を共有することでした。SWET は今も続いていて、その意味でもとても役立っています。

武智: 日本語から英語への翻訳を行っているのは、個人のフリーランスの方が多いのではないのでしょうか。うちは会社組織として、人文・社会科学系の日本語を英語に翻訳することを専門にしています。英語から日本語への翻訳は行わず、日本語から英語への翻訳に徹して、ずっと長くやってきている。まあ、それが特色になっているかと思います。

Riggs: それでは次に、国際文化会館についてお伺いします。佐治さんのほうではどのような運営方式を取っておられるのでしょうか。

佐治: 私にマネージング・エディターという呼称がふさわしいかどうか分かりませんが、長銀国際ライブラリーにつきましては、どの本を翻訳するかが決まって以降のプロセスは上記の図の通りです。翻訳、エディティング、チェックをどなたにお願いするか、プルーフリーディングを誰が行うかを定めることから、経理、印刷、全部含めて私一人でやってきました。

翻訳者が良い翻訳をし、チェッカーがチェックし、エディターがエディットし、著者にもご協力いただいですごく良い英文ができたとして、そこから、多くの場合、DTP 業者のほうに流れていきます。その際、今までせっかく良くなってきたものが DTP のやり方によっては、途端に良くないものになってしまう。英語の本の場合、英語には英語のしきたりというものがある、それを守らな

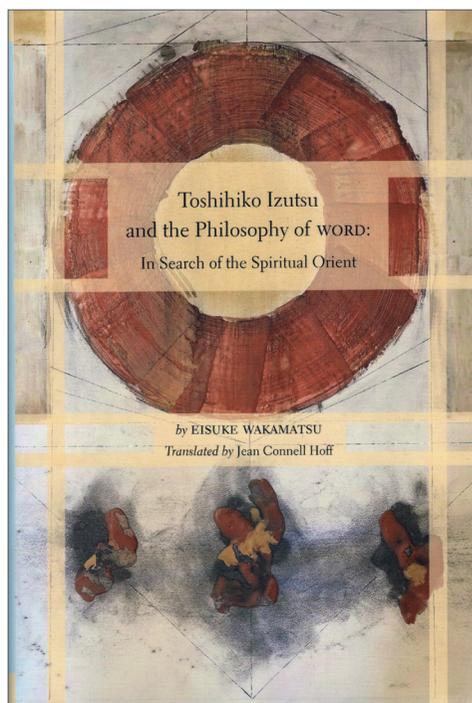
いと、滑稽なものになることさえあります。フォントや typography 等の専門知識がないと、レジビリティを高めることができません。日本ではその辺の認識がまだまだ甘いという感じがします。そういうわけで、あるとき以降、英文組版ルールをきちんと踏まえた DTP にすることを目指して、自分で DTP にも取り組んできました。そのように、雑務を含めすべてをやってまいりましたので、いろいろな問題を体験しました。

一番大切なのは、いまお二方もおっしゃいましたように、どの翻訳者をお願いするかです。これは幸いにして、昨日も少しお話しいたしましたが、サイマルにいたときからこの仕事を担当させていただいていた関係で、サイマルの翻訳者から選ぶことができた。サイマルの翻訳者には非常に優秀な方が多い。なぜかという、あの頃、バブルの頃になりますが、いい翻訳を求める需要がずいぶんあって、それがどんどんサイマルに来ていたのです。「この仕事は難しいからサイマルに出そう」というくらいの reputation がありました。そういう中で皆さん訓練されたというか、大変な思いをしながらも翻訳の実力をつけていったのだと思います。それからすでに 30 年以上経ちましたが、そういう方たちに、それぞれ長銀国際ライブラリー叢書で活躍していただいております。

この内容だったらこの人というの、いっしょに仕事をしている中で分かります。また翻訳者も「この内容だったらぜひやらせてほしい」ということでスタートするわけです。チェッカーもエディターもこの内容だったらこの人がよいのではないかと、この人といっしょに組めばいいのではないかと。去年(2015年)の渡辺先生のご著書の翻訳の場合は、こうした良いチーム体制が組めた上に、渡辺先生の全面的なご協力をいただき、著者と翻訳チーム全員が一体となって、1 パラグラフごとに検証していくプロセスを積み重ねて仕上げるとい、理想的に事が運んだ事例になります。もちろんいつもそううまくいくわけではありません。翻訳者選を間違えてしまって、途中で戻ってやり直したということもありました。

もう一つ、学術翻訳における翻訳者の学問的知識のお話をしますと、長銀国際ライブラリー叢書は、始めから学術書の体裁ではない、一般書として書店で売られているものから選ばれるのです。そうしますと、渡辺先生のご著書のように一般に向けて書かれていながら学術書としての体裁を整えている本もごぞいすけれど、ほとんどは、一般の日本人読者に向けて書かれた本ですから、学術書の体裁にはなっていません。たとえば、三田文学の編集長の若松英輔という人が書いた『井筒俊彦—叡知の哲学』(慶應義塾大学出版会、2011)という本は、非常に難しい学術的な内容で、哲学者の名前がたくさん出てきて、引用がいっぱいあるのですが、何から引用したとかということが、どこにも書かれていないのです。これを訳した人は、長銀国際ライブラリー叢書の中で

Noble さんと同じくらいたくさんのお本を訳してもらっているカナダ人の翻訳者、Jean Connell Hoff さんです。この人はサイマルのインハウスでも長く仕事をされていて、ずいぶん前に大平正芳元首相の『私の履歴書』という本の英語版をいっしょに作って以来のお付き合いなのですが、カナダでは Pontifical Institute of Mediaeval Studies というところで 30～40 年くらいやっていますかね、ラテン語やギリシャ語が本文の半分を占めるような英語の学術書の編集者をされています。日本にも留学し、たとえば歌舞伎に興味を持ったりして国文学を専攻されました。翻訳者としての力量がすごくある人です。『井筒俊彦—叡知の哲学』でも、引用の出典がどこにも書いていないのを、すべて自分で「何の本のどこに出ている」と調べ上げ、きちんと注を付け、ページ数までもれなく明記してくれました。そうやって一般書であった原著を、英語版の学術書の体裁に仕上げたわけです。学術翻訳にとって、こういう人は本当に貴重な存在だと思います。



Encouraging the Next Generation

Riggs: ありがとうございます。マネージング・エディター役をこなされているお三方に、それぞれ違った立場からのご経験をお話いただきました。それでは次に、この翻訳プロジェクトの運営について、ご関心のある皆さんからのご質問の時間を取りたいと思います。何かコメントや質問があればおっしゃってください。Yes, Nina Raj.

Nina Raj: いまのお話で共通していたのが、長年いっしょに仕事をしてきた、信頼できる翻訳者やエディターがどれだけ大切かということでした。それはとてもよく分かるのですが、同時に次の世代を育てるということも必要だと思うのです。そのためには新しい人材を積極的に登用していかなければならない。でも、

Part 3: Effective Scholarly Translation: Management and Process

そこにはリスクもあるということですね。その辺のバランスについてはどのようにお考えでしょうか。

佐治：最近思っていることですが、長銀国際ライブラリーの翻訳者の Noble さんや Jean Connell Hoff さんの次の世代は誰になるのか、おっしゃる通り見えてきていない。でも確信を持って言えるのは、新しい人たちは現実に出始めてきているということです。たとえば、渡辺先生の本を作っているときにチェッカーを務めてくださった井元智香子さん。この方は幼い頃からアメリカにいて、大学まで進んで帰ってきた。そして日本に興味を持って日本関係の翻訳者、エディター、チェッカーになった方です。そういう人が井元さんだけでなく何人かいることが分かりまして、「これから非常にやりやすくなるな」と思った次第です。

Riggs: 私も若い翻訳者を encourage する必要をいつも感じています。その結果、ときどき大きな損失を会社にかけてしまったことがあります。それでも、こちらで扱っている分野に興味のありそうな若い翻訳者にはチャンスを与えたい。その翻訳者がこちらについてこれるようであれば、何回も仕事を依頼して、今のところ 2、3 人、私たちより 10 歳くらい若い翻訳者がいっしょに仕事をしてくれるようになりました。

学術翻訳の仕事についてこれるぐらいの粘り強さと知識を兼ね備えている人はかなりまれで、一度見つけると何とか離れていかないよう気を遣っています。私自身、上の世代の人たちに育てられてきてやっと一人前になれた人間ですから、同じように人を育てることに責任を感じないといけません。Raj さんのおっしゃる通りです。翻訳は、社会的評価は低いですが、研究者と同じように *craftsmanship* のための修業がどうしても必要な職業です。そこを乗り越えてやっとプロになれる。だから先輩たちに「揉まれる」ことに耐えないといけません。

このように、若い人たちを日頃の仕事や付き合いの中で支えたり、encourage したりしていくことがどんなに大事かということを感じるのですが、それは一方的なものではなく、reciprocal な関係でもあるのです。若い人たちといっしょに仕事をしていると、その中で、こちらもいろいろと学ぶところがあり、何より *rusty* にならずにすみます。

Fister: いままで発言された方たちは、皆さん経験のあるベテランですが、後ろにたくさん若い編集者、翻訳者、研究者、いろいろといらしています。昨日のウェルカム・パーティーで戸田ディランさんとお話しして感動しました。彼は皆さんより 30 年後に生まれた人です。かなり日本語もできますし、翻訳もしていて、これからどんどん伸びていかれる方だと思っています。そういう意味でも――

上の世代の経験を若い世代に伝えるという意味でも——このシンポジウムは、とても意義のあるものになっているのではないかと思います。ディランさん、何か一言いただけますか。

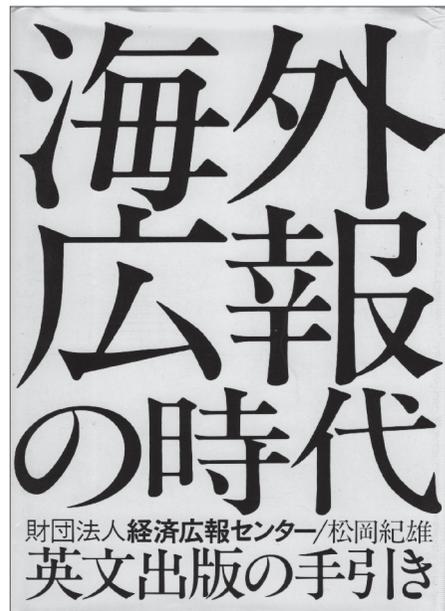
Dylan Luers Toda: はい、ありがとうございます。昨日のお話を聞いていてすごく感じたのは、私の世界とは次元が違うなということです。私は、こういう学術書レベルのプロジェクトにはまだ関わったことがなく、おそらく私と同じ世代の人たちもそうだと思うのです。今は大学院のときに作ってきた人脈を通して仕事をもらっています。たとえば、先生が海外に行くことになって、英語で発表しないといけないのでそれを英訳するとか、そういう仕事が多いです。こうした発表原稿や論文の翻訳の段階から、皆さんが話されている、立派な出版社から出るような本の翻訳をするレベルにどうやって上っていけるのか、というのが今の課題です。

Fister: ありがとうございます。

Riggs: 他に何か、コメントや質問はありませんか？

English Book Layout and Design Know-how

佐治：先ほどDTPのことを申し上げましたが、一つだけ補足させてください。DTPの分野について、私は自分で行うようにしてきたのですが、最近いろいろなことが分かりました。たとえば、Nobleさんは翻訳者でありながら、ブックデザイナーでもあるのですね。また、世界のタイポグラフィの業界で永年貢献してきた日本人が何人かいらっしゃるのですが、その方々は自分で書体をデザインして、インターネット上などで一般のDTPに使えるようにしておられる。ある方とは、私はずいぶん昔から知り合いだったことが分かったのですが、そういう人たちともいっしょに仕事ができるような環境がで



Part 3: Effective Scholarly Translation: Management and Process

きつつあるという印象があります。ですから、私がやろうとしているように、印刷会社にまかせっきりにしないで、自分たちで協力しながらDTPを行うというのも、一つの流れになり得るのではないかと。テキストの内容と形式が一体のものとして仕上がってこそ良い本になります。その意味で、いまの日本の英文出版は、形式面ですいぶん損をしている気がします。

Riggs: 確かに、英文出版のしっかりしたノウハウを持っている日本の印刷会社は少ないですね。校正のときのそういう直しに多くの時間を取られてしまって、閉口することがあります。『海外広報の時代—英文出版の手引き』というしっかりした本が1982年に出版されていますが、その頃からあまり進んでいない気がします。

他に何かないでしょうか、どんなことでも結構です。

Offshore Translation Services

後藤：翻訳者の選定が何より肝腎である、こういう翻訳をしたいからこの方に頼むという考え方——本当にその通りだと思い、感銘を受けました。今日ここにお集まりの翻訳家の皆さんは、主に人文・社会科学の見識をお持ちになった、いわばartisanのような翻訳家の方々にいらっしゃると思います。一方、主に自然科学系で活動している、たとえばインドにマンパワーを持っている大きな翻訳会社が日本にあることは、皆さんご存じだろうと思いますが、この会社は、納期をきちんと守り、支払い形式に融通性があり、単価もはっきりしているため、大学組織などから非常に受けがよいです。ですから出版部にも、「そっちを使ったらかどうか」という圧力がかかることもあります。こうした会社組織による翻訳の長所、ないしは問題点について、今日お集まりの皆さんでのご存じのことがあればぜひ教えていただければと思います。こうした自然科学系もやるような会社組織では、人文・社会科学系の翻訳を担当する翻訳者の位置づけはどうなっているのかについても、ぜひお伺いしたいです。

白石：私のこれまでの経験の中だけの話なのですが、日文研の場合、学術書1冊分の翻訳というようなときは、信頼できる、翻訳の質が保証されている方にお願いすることが多いです。一方たとえば、簡単な書類、具体的に言いますと、海外の出版社との契約書などを、英語から日本語に訳すときには大きな翻訳会社に頼んだことがあります。勝手に分かっている事務的な書類ですと、それほど大きく間違っていなければ、特に英和翻訳であれば、不備があってもある程度こちらで直せますので、大きな翻訳会社で安く引き受けてくれるところに頼んでもよいかとは思っています。ですが、そういうことをやってみてつくづく思った

Project Initiation and Management

のは、やはり「会社でなく誰が訳すかだな」ということです。特に大手の会社に頼んだ場合、訳している人の顔が見えません。その会社の中で信頼できる方が見つければ、その会社のその人という指名でやっていけると思うのですが、なかなかそこに行き着けないのです。ですから、やはり会社ではなく人だな、という結論に至りました。

オーディエンス：いま収入の1/3ぐらいを、そのインドに本社のある大きな会社の仕事で稼いでいます。ここだけの話ですが、本当にお勧めできません（笑）。なぜかと言うと、単価が安い分、丹念な仕事は期待できないからです。完成版ができるまでに4、5人が原稿を読んでいます、会社の単価が安いので一人ひとりにたくさんのお金は出すことはできません。こちらも、どれほど時間を使っているのか意識して翻訳作業をしています。急いで行わないと割に合いません。お金にならないのです。適当な訳を出して、チェッカーに回します。チェッカーの方も、ペイはずっと低くて、やっぱり適当に仕事をしてしまう。みんな本当に適当ですよ（笑）。会社を通さずに私個人に依頼があった仕事は、その数倍の翻訳料をいただいているので、それはきちんとやります。それが現実です。

後藤：とても参考になりました（笑）。つまり会社組織に頼むにしても、「人の見える」組織にお願いすべきだということですね。ありがとうございました。

Riggs: 会社組織自体が悪いということではないと思うのですね。先ほどの話につなげて言いますと、その組織が、翻訳者を使い捨てるの存在として考えているか、それとも翻訳者を育てようとしているかの差が、良し悪しに関係してくると思っています。自分の経験から申し上げますと、私自身、最初はタイピングしかできない状態から始まって、同僚といっしょに仕事をしていく中で、だんだん日本語をどう理解したらよいか、テキストの背景にどのような隠れた歴史的、社会的な事情があるか、それを英語にどう表現したらよいかといったようなことまで教わっていきました。給料は安かったけれど、自分が学んでいる、伸びているという感覚があって、それが大事だった。また同僚との間に、翻訳を共に作り上げているという *comradeship* があって、それが40年も続けてこられた秘訣だと思います。一人で孤独にやっていたら、実力もつかないし、とても続けられなかったでしょう。今だってみんなの協力があるから、何とか難しい仕事をこなせているのです。

David Noble: 佐治さんがおっしゃったサイマルという会社は大きな翻訳塾みたいなところでした。80年代のサイマルですね。いま翻訳者として活躍しているいろいろな方々——あの時代には若い大学院生、大学卒業生だった——が、会

Part 3: Effective Scholarly Translation: Management and Process

社に入ってから翻訳を習ったわけです。僕は1980年に入って、ほとんど日本語もろくにできなかったときですが、インハウスで、周りの経験ある翻訳者がどう作業しているか、チェッカーがどうチェックするかを間近で見ることができた。クオリティにうるさい時代で、翻訳体制は実にしっかりしていました。そしてそのときの翻訳のマネージング・エディターの人が、「若い人に教える」という情熱を持っていて、それがこちらにもはっきりと伝わってきました。ただビジネスで翻訳を行っているのではなく、これは一種の教育なのだという考え方を持っていた方です。そういう教育的な人間とインスティテューションを欠いている場では、翻訳者は育ちにくい。翻訳は自分一人ではとても行えないです。本当に良い翻訳は、インスティテューションの中でしかできないとさえ思う。今は翻訳者を育てられるような環境がほとんど見られず、残念です。今後そういうインスティテューションをどのように作っていくのが大きな課題だと思います。

Murray: David さんにお聞きしたいことがあります。サイマルで働いておられたとき、経済的に独立できていましたか？ それとも奨学金や grant などをもたらっていたのでしょうか。

Noble: サイマルに就職したのは、ちょうど IUC (Inter-University Center for Japanese Language Studies in Tokyo)² を出たときのことで、翻訳という現場で日本語を勉強したいという動機からです。アメリカに帰って再び大学院に戻ることも考えていましたが、やはり1年くらい日本で実務経験を積むことを選んだのです。サイマルにはフルタイムで就職して、きちんと給料をもらっていました。

Murray: サイマルは経済的に余裕があったのですね？

Noble: あの時代はね。

Murray: 私たちも同じで、就職は幼稚園に入ったようなものでした（笑）。社長が保母さんで、私たちは何も知らない幼稚園児。でもそのまま何年もいて、少しずつトレーニングを積んでいくうちに、何とかなるようになったのです。

けれども一つ今と違っているのは、その時代は経済援助がわりにあつたことです。当時はうちは財団法人でしたが、経営がギリギリになりそうなときに、手を差し伸べてくれるところが出てきたりしました。でも、うちの社長は誰か

2 Now located in Yokohama. https://www.iucjapan.org/index_e.html

Project Initiation and Management

に頼ることが嫌いで、一度変なところがお金を出してくれそうだったので、ちょっと怖くてお断りしたこともあります（笑）。

私が言いたいのは、Noble さんが言ったように、確かに翻訳者を養成してくれるインスティテューションがあれば理想的、でもそれは経営的には大変だということです。若い人を養成したいけれども、若くてまだ経験のない人たちには、すぐには稼げるだけの productivity を期待できないからです。それが大きな問題です。

Institutional Approaches to Translation

Murray: 日文研の方に一つお聞きしたいです。日文研以外の institute——たとえば民博（国立民族学博物館）とか、あといくつかありますが——では、和申、和英、和韓、何でもいいですが、どのように翻訳者を探していますか？

Fister: 私はそのあたりはよく知りません。人間文化研究機構（NIHU）自体は特定のところも使っていますが、bidding 制で翻訳業者を決めているようです。白石さんはご存じですか？

白石: いいえ、おそらく個別の研究者、プロジェクトごとに、翻訳者を選んでいるのかもしれませんが。たとえば、総合地球環境学研究所（地球研）や国立民族学博物館（民博）というところは、組織立った出版部をお持ちではないと思います。³

Riggs: ありがとうございます。翻訳発信について、NIHU の他の研究所でどのくらい予算や労力をつぎ込んでいるのかというのは興味深い question です。

白石: 3、4 年くらい前ですが、「民博で同じような組織を持ちたいので実状を教えてください」という電話をいただいたことがあります。その後、表立って組織ができたという話は聞きませんでした。同じ機構の中でも、あまり情報共有ができていない状況です。

瀧井: 「翻訳塾」という言葉が出ていましたが、日本の場合は、大学教育、大学院教育がまさに翻訳塾的な機能を果たしていると考えられます。私は、元はヨーロッパ学を研究していたのですが、日本の大学では、学部のときから外国語講読という授業があって、たとえば私は法学部だったので、英語、ドイツ語、フランス語の法律書を逐語的に翻訳していく、そういう授業が——今もあるかど

3 2018年現在、地球研には国際出版室がある。

うか知りませんが——私が学部ของときはまだありました。大学院にもそういう授業があり、まさに翻訳道場といった趣きでした。

明治以来、日本の西洋文明・文化の導入は翻訳を通じて行われました。学問は翻訳だという部分が大きかったと思います。ですから、大学の先生は翻訳をしなければいけないという意識が結構あるのではないかと思います。だいたい学術書の翻訳は、日本では大学の先生がやっているわけです。大学の先生が「この本を訳したい」と思って出版社に頼み込む。翻訳者が、いわば個人的なセールスで出版社に売り込んで、出版に漕ぎつけるというやり方ですね。

もちろん出版社がイニシアティブを取ることもあります。たとえば去年⁴ベストセラーになったトマ・ピケティの『21世紀の資本』ですが、あれは、みず書房が著作権を取ってから翻訳者を探したというケースだと聞いています。しかし大体は、大学の先生が、海外の自分の専門に関わる学術書を訳したいと言って、馴染みの親しい編集者に頼んで著作権・翻訳権を取ってくれないかと交渉し、自分で翻訳して出版するケースが結構多いと思います。そういうやり方はアメリカでも見られるのでしょうか。日本の学術書に惚れ込んだ——大学の先生でなくてもよいですが——翻訳を希望する人が、「私はこれを翻訳したい」と言って出版社に売り込む、そういうケースは今まであったのでしょうか。

Kate Nakai: 昨日紹介しました3冊の本は、大体そういうやり方でできたものです。大学の研究者が出版社に話を持って行って、幸い出版社が興味を示してくれて出版された本です。

ただし、日本での翻訳出版とは違っている点もあります。一つは、日本の場合、翻訳をする先生は翻訳料を支払われるのですが、これらの3冊の本については、翻訳は無償です。大学の研究者は給与をもらっているのです、翻訳で稼ぐ必要はありません。あくまで研究活動の一環として翻訳をするわけです。

もう一つは、元々日本語で出版されている本をそっくり翻訳するというのではなく、その本の中に良いものを見つけた海外の研究者が、その著者である日本人研究者に共同研究プロジェクトを持ちかけ、同じテーマについてより簡潔な原稿を新しく書いてもらって、海外の研究者たちと同じ場で発表してもらい、その発表を英語に翻訳し編集して、他の研究者たちの論考と共に1冊の本にまとめるというやり方です。私はこれをとても有意義なやり方だと思っています。

そういう本の場合、あまり資金がないので、プロの翻訳者を頼むことはでき

4 Probably 2014 in the U.S. and 2015 in Japan.

<https://www.nytimes.com/2014/04/27/fashion/Thomas-Piketty-the-Economist-Behind-Capital-in-the-Twenty-First-Century-sensation.html>; <https://www.kinokuniya.co.jp/c/20151201123023.html>

Project Initiation and Management



ません。ですから大体——学生に翻訳を頼むこともあります——研究者や編集者が主体になって翻訳し、相当手を入れて原稿を準備します。こういう形で出版された本は、かなりの数があると思います。

Sarah Kuramochi: 先ほど民博はどうかという質問がありました。規模は全く違うのですが、私は小さな公益財団の資料館のアーカイブ部門で働いています。非常勤のパートタイムですが、私たちのやっている英訳では、一部をCICなどに出し、一部を出版元のジャパン・ジャーナルに出して、最終的に私が全部の原稿をチェックするという体制を取っています。

その中で皆さんがおっしゃっている、人間関係の大事さというのは私も感じています。直接会わなくても、連絡を取ったり話し合ったり、あるいはうちの資料館に来て見学をしていただいたりする中で、お互いに気心が通じ、それが仕事にプラスに作用します。

一方、ジャパン・ジャーナルとの関係では、誰が英訳しているのかさっぱり分からないし、毎回違う人ですし、関係が作れません。向こうも私たちのことを知りません。でも、ジャパン・ジャーナルの翻訳は速いのが取り柄です。

ですから両方とも、良いところとそうでないところがある。最初から私が翻訳する場合もあり、いろいろ取り混ぜてやりくりしています。日文研さんほどの規模の翻訳ではないですが、ご参考までに。

佐藤エミリー: 日本翻訳者協会 (Japan Association of Translators) というところから来ました佐藤と申します。先ほどの後藤さんのお話の中に、翻訳会社の話がありました。私の入っている団体のメンバーは、ほとんどが産業翻訳者、実務翻訳者です。

Part 3: Effective Scholarly Translation: Management and Process

実務翻訳の世界では、去年のことですが、ISO17100 という規格ができました。これは適正なプロセスを経て業務を行っている翻訳会社には、ISO17100 認証をしましょうという規格です。プロセスが全部決まっています、審査官が来てそれぞれのプロセスを見て、適格であれば認証されるわけです。

ただし、これは翻訳の品質を担保するものではありません。「ちゃんとしたプロセスを経て、ちゃんとお金が支払われているのなら、ある程度品質が保証されている翻訳だろう」という推論によってお墨付きが与えられるのです。まあ、これがあるから信頼できるということにはならないかもしれませんが、少なくともこれによって、良くない会社は淘汰されていくのではないかと思います。たぶん学術翻訳の世界には来ないかと思いますが、日本の実務翻訳の人たちのあいだでは「黒船が来た」という感じで受け止められています。いままで翻訳品質を担保するものが何もなかったところに、そういうものが登場したということで若干注目を浴びています。ご参考までに申し上げます。

Riggs: ありがとうございます。日本の組織、とりわけ公的な組織の問題の一つは、そういう英文出版関係の部署についている方々が、私たち翻訳者や編集者と人間関係を築いて、お互いにノウハウを蓄積していくのですが、ある程度蓄積ができて、仕事がスムーズにいくようになったらと思って仕事をさせてもらっていると、その担当の人が、配置換えになったり、任期で辞めざるを得なくなったりということによくあるのです。そうすると、新しい人とまた、ほとんど同じような問題をめぐって、同じようなプロセスをゼロからくり返さなくてはならなくなるのが残念です。組織には組織の事情があることは承知していますので、何かいい知恵はないものかとよく考えます。

それでは次のセッションに移りたいと思います。